

# 倉敷市蔵薄田泣菫文庫 満谷国四郎書簡 翻刻・解説

羽原卓也・西山康一・山本秀樹ほか

はじめに

以下に紹介する薄田泣菫宛満谷国四郎書簡は、泣菫の遺族により二〇〇四（平成十六）年に以降に岡山県倉敷市に寄贈され、現在「薄田泣菫文庫」として倉敷市役所に保管されている資料に含まれる。国四郎から泣菫に送られた一連の書簡である。本稿では、この「薄田泣菫文庫」に蔵する未發表書簡を含めた満谷国四郎書簡の全ての本文翻刻、ならびに解説を試みることをとする。

明治・大正・昭和を生き抜いた洋画家満谷国四郎（一八七四～一九三六）と、文学者かつ編集者であった薄田泣菫（一八七七～一九四五）。この二人の岡山出身の文化人の長きに亘る交誼については、『薄田泣菫考』（松村緑 一九七七年九月 教育出版センター）、『泣菫残照』（満谷昭夫 二〇〇三年一月 創元社）、『泣菫小伝』（薄田泣菫顕彰会 二〇〇二年五月～二〇〇二年八月）、『満谷国四郎残照』（満谷昭夫・宮本高明 二〇〇八年十月 創元社）等に詳しいため、ここでは概略にとどめておきたい。二人

の出会いに関して、泣菫は「詩集の後に」「泣菫詩集」（一九二五年二月 大阪毎日新聞社）で次のように綴っている。

満谷氏は同じ中学の先輩で、代数の教科書の余白といふ余白を、すっかり受持教師の百面相で埋めてゐたほどの人でした。私が十八歳の春上京して暫く厄介になつてゐましたのは、牛込宮比町の開鶏書院といつた漢学の私塾で、塾の先生は山田方谷の門弟宮内鹿川といつた王学の老先生でした。私は鹿子木孟郎氏などと一緒に、そこにおいて貰つて、夜は伝習録の講義などを聞いてゐましたが、その頃は漢学が一向に振はなかつたものですから、開鶏書院の門をくゞる若い学生はたまにしかありません。（中略）私が一人で塾の留守番をしてゐますと、そこへひよつこりはいつて来た男がありました。その男は、『私は日暮里にゐるもので、毎日こちらに通ふわけには参りませんから、一週一日でも二日でも、参つた折にたて続けに三四時間、本の講義が聞かしていただけないでせう

か。」といつて頼むのです。その顔をよく見ますと、忘れもしない、代数の教科書に教師の似絵を書き散らしてゐた満谷国四郎氏でありました。(中略) 私達はその日から仲の好い友達となりました。で、それから五、六年後の詩集『ゆく春』に同氏の挿画をおたのみすることになつたのです。

これが縁となり国四郎は、泣菫の詩集『ゆく春』(明治三十四年十月)に続いて『しら玉姫』(明治三十八年六月)の挿画装幀を担当し、『白羊宮』(明治三十九年五月)では、鹿子木孟郎(一八七四―一九四一)とともに挿画を入れた。二人は仕事以外でも親交が深く、明治三十九年十二月に泣菫が結婚した際には、国四郎からお祝いの葉書が寄せられている。また、夙に前掲松村縁『薄田泣菫考』が紹介するように「後年松尾哲太郎の媒酌で、泣菫の長女(まゆみ)が国四郎の甥、工学士満谷三夫(のち、倉敷レイヨン取締役)と結婚したので、この親友同志は更に姻戚関係」を結ぶことにもなった。

「薄田泣菫文庫」に所蔵される満谷書簡は全部で三十六通に上る。紙幅の関係上、まず今回はそのうちの半分——年代順に並べて最も古いものから十八通を取り上げることにした。ただし、その中でも以下に掲載の書簡番号⑥・⑪・⑮・⑰は、既に前掲満谷昭夫『満谷国四郎残照』で紹介されている。が、本稿では、それらとともに以下で紹介する全ての書簡を並べてみることで、二

人のやり取りがより明確に理解できること、また我々の翻刻と「満谷国四郎残照」で示された翻刻とに若干の相違点のあることから、既にそこで紹介済みのもので取り上げることとした。

これらの書簡から、二人の岡山出身の文化人とその周辺の、より詳細な実態が明らかになる。後に太平洋画会を作る画家たちとの欧米旅行で国四郎が見たもの、あるいは文壇作家たちから多くの寄稿を得た大阪の文芸誌『小天地』における編集者泣菫と挿画家国四郎の仕事ぶりなど、異なる分野で活躍した二人の交流が、当時の画壇・文壇においていかに影響を及ぼしたかが浮かび上がってくることだろう。

## 翻刻と解説

### 【凡例】

- 一、各書簡の見出しには発信年月日をあげ、その後に封書・ハガキの別、用紙、筆記具の情報を記した。
- 一、発信年月日は、自筆で記されたものを採用した。記載がない場合は消印により、また、消印でも確認できない場合は内容から推定した。

一、【発信者欄】・【受信者欄】には、書簡に記された発信者・受信者の人名・住所等のそれぞれの欄に記載されてあつた情報を記した。ただし、【発信者欄】に関しては、ハガキ表面や

封筒裏面にそれに当たる記載がない（あるいは少ない）場合、書簡本文末尾の記載をあげている。また、読みやすさを考えて、適宜一マスあけ・改行を施している。

一、【発信局印】・【受信局印】には、消印にあつた情報をそのまま記した。ただし、やはり読みやすさを考えて、適宜一マスあけ・改行を施している。

一、翻刻部分では、内容による改行の場合には原文通りに行つたが、内容に関係ない改行については読みやすさを優先して記述に反映させなかつた。また、改行・句読点のない内容の切れ目には、読みやすさを考え、適宜一マスあけ等を施している。

一、書簡の印字・印刷部分で、重要と思われぬ内容は適宜省略した。

一、漢字表記は原則として現行通用の字体とした。

①明治三十三年十一月二十三日 ハガキ ベン

【発信者欄】ボスストン府ニテ 満谷園四郎〔本文末尾〕

【受信者欄】Kinika, Susukida, Esq. Osaka, Japan.

大坂心斎橋通金尾文淵堂書店内 薄田淳介様

【発信局印】BOSTON NOV 25 9:30 MASS

【受信局印】摂津 大□〔阪か?〕 卅三年〔月判読不能〕二十

□ 郵便

歸国ノ際ハ飛ダ間違ヒテ 御目ニ掛ルコトガ出来ナクナテ残念仕候 又大兄ノ新作行ク春ヲ 今回旅行ノ友ニ御願申タカタモ ド  
ヲヤラ水泡ニ帰シテシマツタ 小生ハ十一日世目不足ノ旅行ニテ  
洋ト陸ヲ横リ今ハ大西洋ノ岸ニウロズキ居申候 画ハ当地タカラ  
甚ダウマイ者モ少イカ 古画モアリ仏国名家ノ画 比較的傑作ガ  
アルカラ少々息ガツケル 小生ハ一月中ニ「ユー・ヨルク」ニ行テ  
ダンダン海ヲコヘル仕度ニラスル 今ハ着早々多忙デ批評モ出  
来シガ 其ノ中話スガ見ネバダメ 小生ノ世界ガ広クナリカカッ  
テ大ニ心モチガ好シク候  
益御奮勉御盛ニ願上候 余ハ後便ニ 金尾サンニ宜しく ボスス  
トン府ニテ 十一月廿三日 満谷園四郎

【解説】「行ク春」は、一九〇一（明治三十四）年十月に金尾文淵堂から出版された泣蓮の詩集「行ク春」を指す。園四郎は泣蓮の依頼によつてその装丁・挿絵を担当している。この書簡は「行ク春」の初版が発行された約一年前に書かれたものということになる。この頃の「明星」の広告欄に「行ク春は今巻出す可りしが騒人愁多く著者に懊悩ありて果さず今秋高ク気爽なる時漸く梓に上る」（「明星」第七号 一九〇〇年十月十二日）とあるが、ハガキが書かれた十一月下旬の時点でも、「旅行ノ友」にすることは叶わなかつたようである。「今回の旅行」とは、明治三十三年「十

月に丸山晩電、河合新蔵、鹿子木孟郎と共に横浜港を出港し、渡米。十一月 河合・丸山・鹿子木・澗谷、ボストン着」(もうひとつの明治美術)もうひとつの明治美術展実行委員会 二〇〇三年七月 二二七頁)を指す。この書簡もその渡欧中のものだと考えてよいだろう。横浜港から太平洋を渡りアメリカ西海岸へ、そこから大陸を横断しボストンへという流れか。

②明治三十三年十二月二十八日 ハガキ

【発信者欄】澗谷国四郎

<sup>(7-2)</sup>  
Bankyo matsuki

980 Boylston st

Boston Mass USA. [本文末尾]

【受信者欄】JSusukida Esq. c/o Binrendou Ousaka Japan

大阪心齋橋筋書店文淵堂内 薄田泣蓮様

【発信局印】BOSTON DEC 29 6PM □□ MASS

【受信局印】摂津 大阪 卅四年一〇(月か?) [日判読不能]

二便

謹賀新年

ドラデス面白デスカ 僕モ渡米以來面白クテ君ノ処ニ出ス手紙  
モ忘テシマツタガ 其内長イノヲ出ソヲ思フガ此等ハマタダノダ  
意大利ナドノ空氣ヲ吸ハヌ内ハイケナイガ 然シ見ル物ハアル

サスガ金モチ国ダケニ少シハ古クヨキ者モアルカ 新作ニテハ欧州ノ者モ多イガマア少ナイ 僕モ此レカラ「ニューヨ」ヤ「ワシトン」ヤヲ見テ 四月ニハ欧州へ行カレソラダガ ソレカラハ大ニ羽ヲハヤシテ欧州ヲ飛廻ルコトダカラ 面白ヒ者モ見セラレヨ ヲト思フガ 帰テノ御土産グライダロラ 思ヨニハ書ケンノダカラ 兎角モ愉快ダ 十二月二十八日 澗谷国四郎

<sup>(7-2)</sup>  
Bankyo matsuki

980 Boylston st

Boston Mass USA.

【解説】これは①の約一カ月後に書かれたもので、ボストンから泣蓮へ宛てた年賀のハガキとなっている。アメリカに存在する絵画の物足りなさ、渡欧に対する期待感が窺える。発信者住所の「Bankyo matsuki」とは、松木文恭のことではないかと思われる。松木文恭は当時ボストンに在住していた日本人であり、同舎の学友らが、一九〇〇年「松木文恭、松木喜八郎兄弟の援助を得て、十二月五日(水)〜十五日(土)、ボストン・アート・クラブで展覧会を開催」(鹿子木孟郎展―師ローランスとの出会い―府中市美術館 二〇〇一年四月 二二四頁)したという。この旅行では、「用意しておいた各人の水彩画によって展覧会を各地において開催し、その作品の売り上げをヨーロッパ行きへの費用に当てるといったものだった。当時のアメリカにおける日本

趣味、いわゆるジャポニスムも結果的には幸いして、ポストン・ワシントン各地での展覧会も成功をみた」〔満谷国四郎展〕岡山県立美術館 一九九三年一月 一二二頁とされる。

③明治三十四年三月二十日 絵ハガキ ベン

【発信者欄】ワシントンニテ 満谷国四郎〔本文末尾〕

【受信者欄】 K.Susukida Esq. Osaka. Japan.

大坂心齋橋筋 金尾書肆カ出版部カ 薄田淳介様

【発信局印】 WASHINGTON, D.C. MAR 21 4PM 1901

SANFRANCISCO, CALIF. MAR 25 9PM

【受信局印】 摂津 大阪〔以下判読不能〕

扱て其後如何御暮し被成候や 松尾君カモ時々御様子承り居候  
益々御盛ノ様子敬賀ノ至ニ奉存候 小生モ無異状ナク春光ト共ニ  
飛廻り居リ 只今ハ当地ニ滞在、是レカラ「ピラテ」「ニューヨー  
ク」ヲ経テポストンニカヘリ 来月最初船便ヲ英国ニ赴キ順次意  
太利ノ方ヲマワルツムリ イズレ面白イハガキハ イタリイカラ  
ノツムリタ 金尾サマニ宜シク 段々ト茂盛デ定メシ面白イコト  
デアアラ サラバ ワシントンニテ 満谷国四郎 三月廿日

〔[MELPOMENE] (LIBRARY OF CONGRESS.)〕 (絵めろ)

【解説】②の書簡の約三ヶ月後のものである。②で「四月ニハ欧州へ行カレシヲタ」とあったように、この書簡でも「来月最初船便ヲ英国ニ赴キ」と、四月にアメリカから渡欧する旨が記されている。実際、明治三十四年四月「河合・丸山・鹿子木・満谷の四名はニューヨークを出港、ヨーロッパへ向かう」〔六月「河合・丸山・鹿子木・満谷、パリ着」〕〔前掲「もうひとつの明治美術」二三七頁〕とあるので、書簡通りであることが窺える。この後、「イタリア、

オランダ、イギリス各国を歴遊した後帰国。十月京都御苑内で開かれた関西美術会第一回展覧会に「山村晩暉」(少女)の二作品を協賛出品」(前掲「満谷国四郎展」一四四頁)とされていることから、十月までに帰国していることが分かる。「松尾君」は岡山中学の頃から満谷と親交のあった松尾哲太郎のことであろう。

④明治三十四年七月二十四日 絵ハガキ ベン

【発信者欄】 Via Londres et Amerique (表) ローマニテ 満谷生

〔本文末尾〕

【受信者欄】 Mensie K.Susukida Osaka Japan

大阪心齋橋筋 金尾文淵堂出版所ニテ 薄田泣童様

【発信局印】 ROMA 17 □□□□ F□□□□ VIA (FERR

OVIAカ)

【受信局印】 KOBE 24 JUL 01 JAPAN

摂津 大阪 廿四年七月二十五日 イ便



書簡④ 明治三十四年七月二十四日

御無沙汰ニ打過ぎ候 是レハ「バチカン」ノ天井画ニ御座候  
 後ハ「モザイク」ニ候 Poetryト云フノダス 一兩日ノ中「ポ  
 ンペー」ニ行キ「夫レカラ」フヲコレニス」ニ參リ可申候 早々  
 ローマニテ 満谷生

【解説】③の書簡から約四ヶ月後、国四郎がローマに滞在してい  
 た頃のものである。ハガキ裏面に印刷されているラファエロの《詩  
 (La Poesia)》についての解説と、近々ポンペイ・フローレンス  
 を回ることが綴られている。泣菫が詩人であるため、国四郎はこ  
 の絵ハガキを送ったのだろうか。ちなみに、ラファエロの《詩》

は、ヴァティカーノ宮「署名の間」天井の円形寓意像の一つ。  
 これらの女性たちはすべて金地にグロテスク文様と木製円花紋を  
 配した円形の装飾帯に囲まれ、モザイクづくりのように見せかけ  
 た金地を背に雲の上の玉座に座している。『世界美術大全集』  
 一九九四年十二月小学館 四一六頁」とされている。つまり、国  
 四郎の説明では「モザイク」(小石を敷き詰めたもの)とされて  
 いるが、それは誤りで、実際はフレスコ画(塗った石灰が生乾き  
 のうちに絵を書き上げたもの)である。

⑤明治三十四年十二月一日 ハガキ フデ

【発信者欄】東京日暮里村 満谷国四郎(本文末尾)  
 【受信者欄】大坂東区谷町八丁目 百九十番本長寺内

薄田淳介様

【発信局印】東京 駒込 34・12・1 后 0 3/6  
 【受信局印】□□ 大阪 □□十二月二日 二便

御芳簡並ビ奉草拜見 度々ノ御送与ハもつたいなき次第ニ存居候  
 兎角兄之御親情ハ慥ニ肝銘仕候 先日ノ御目ニ掛ケタヤツハ後デ  
 モ面白くなく思ワレタル者ナレバ其候貴兄ノ手ニアレバ幸モ甚ダ  
 しき者ニ存候 端書ノ方ハ六ツタケニ三日中ニ懇考御送り申上度  
 存候 先ハ取不肯御返答迄 何れハ書面ニテ 草々 東京日暮里  
 村 十二月一日 満谷国四郎

【解説】「春草」は詩のアンソロジー「春くさ」（金尾種次郎編

金尾文淵堂書店 明治三十四年十月）のことか。泣蓮の四篇の詩もそこに見出せる。この頃、国四郎は泣蓮が金尾文淵堂で編集をつとめる雑誌「小天地」の表紙を担当していた。「御目に掛ケタ

ヤツ」とは、「小天地」に載せる表紙の原案か。「小天地」第二巻第五号（明治三十五年二月一日）の表紙《梅枝》は国四郎作である。また、「小天地」には付録として絵はがきが添えられており、それも国四郎が担当していた。「小天地」第二巻四号（同年一月一日）の絵はがき《二葉（梅）》と《虎》は国四郎が制作したものである。

⑥明治三十五年八月八日〔年推定〕ハガキ フデ

【発信者欄】銚子黒生浦 みつたに、（本文末尾）

【受信者欄】大坂東区南本町四ノ三十六 金尾文淵堂ニテ

薄田淳介様

【発信局印】下総 銚子〔子か？〕 卍 八月六日 二便

【受信局印】大□〔阪か？〕 □・∞・∞ □<sub>1000</sub>

拝啓 此頃の御起居如何 雨降りて実ニ閉口此上なし。君ノ方モトラく先月中に出来ズ申訳なし 十四日ニ帰ルカラヤリマシよを 用事アレバ東京方へ願ふ。先ハ御見舞迄 草々  
銚子黒生浦 みつたに

（このハガキに描かれた国四郎筆の絵について、書簡本文は掲載されていないが、『満谷国四郎残照』一〇五頁に「浜辺で陽に焼けて真黒になった二人の子供などの自筆の絵」と紹介されている。）

【解説】暑中見舞いのはがきである。消印は捺圧弱く年の数字が不鮮明だが、三十年代であることは判読でき、宛所からして泣蓮が大坂金尾文淵堂に寄寓していた明治三十三年六月―明治三十六年八月（前掲『泣蓮残照』二二―頁―二二頁参照）の書簡であることは確かである。その頃の朝日新聞の記事に、「洋画家の海岸旅行 洋画家小山正太郎氏家塾同舎員ハ寫生のため来る十日総房海岸へ向け出発する由」（『美術彙報』『東京朝日新聞』明治三十五年八月四日）とある。小山正太郎は国四郎の絵の師であり、この旅行に参加するために国四郎も銚子に滞在していたものとも推測される。その場合「君ノ方」は、「小天地」の表紙（第二巻十三号 明治三十五年十一月十日 表紙絵《黄菊白菊》）もしくは絵はがき（第二巻十二号 明治三十五年九月十日）の原案に該当するか。

⑦明治三十五年八月三十日 ハガキ ベン

【発信者欄】東京日暮里千百十八 満谷国四郎（本文末尾）

【受信者欄】 大坂東区南本町四丁目三十六 文淵堂ニテ

薄田淳介様

【発信局印】 東京 駒込 □・8・30 后11:30

【受信局印】 □□ 35-9-1 □(前か) 5:30

雨天勝ノ氣候モ昨今ニ至りて特ニ甚しく曇ク閉口モ通り過て避暑ノやり直しでもやる他ハ仕方ナイコトダ 相不変御多忙御察し申上候 先日小天地頂戴面白ク拝見仕候 肖像が大変遅クて失礼然モ急でウマイ者出来ズ此レデモ御間ニ合ハバ幸甚、今一ツノ君

ノ依頼ハ長く君ノ宝物ヲケガスコトナレバ今少シ御猶予願上候 大坂ガ来年ハ中々景色ガ面白サヲでスガ種々企てガアルラシイ何カノ都合で小生モ一度ハ下坂シタイト存居候 ○君ノ御上京ノ期自何鶴首相待申居候 ドラモ勉強ガ出来ぬので困リ居申候 早く帰テツマラナイコトヲシタト思ヒ居申候へとも此モ因縁ツク

テ今更致方なし ○此頃ハ写真ハ如何 発送ニハ少シ面倒ナレバカヘテ安全ナレバ送りましょーか 画が少イト何ダカさむしい様でスナ、下村君ニ遇タラ宜しく頼む

東京日暮里千百十八 満谷国四郎 八月廿日

【解説】「避暑ノやり直し」は、この直前、国四郎が避暑に行っていたことを示すと考えてよいだろう。「早く帰テツマラナイコトシタ」というのは、避暑地からの帰りが早すぎたために「甚し

ク暑ク閉口」していることを示すと捉えられる。その避暑地は⑥の手紙から推すと銚子あたりの房総半島か。「先日小天地頂戴」とは、「小天地」(第二卷十一号 明治三十五年八月十日)の表紙(「月下横渡」を国四郎が担当したため、泣菟が「小天地」を国四郎に送ったものと考えられる。「大坂が来年ハ中々景色が面白いサウ」は、明治三十六年に第五回内国勸業博覧会が開催されることを指しているであろう。「下村君」は、当時「小天地」の挿画像紙を担当していた下村為山であろう。

⑧明治三十五年十月〔日未詳〕ハガキ ベン

【発信者欄】 東京日暮里村千百十八 満谷国四郎〔本文末尾〕

【受信者欄】 大阪市東区南本町四ノ三十六 文淵堂ニテ

薄田淳介様

【発信局印】 東京 駒込 88・20・□(3か?)

【受信局印】 (判読不能)

拝啓 先日小天地頂戴 表紙ノ面白イノニ驚イテ実ハ某画伯ノ手ニナリシモノカ開キ度存候節 兄ノ筆トハ又一驚ヲ頂戴仕候 宜しく時々御試みラルべく敬服ノ外なし 先日ノ小生ノモ大テコズリデアマリ宜しくない ○先日ノ大風雨小生ノ処ハ穴の中の如き処でスカラ大した事も成かツタノでした 柿ヤ栗ガ落チタノで少シ閉口シタグラハ 此レモ甘クシテ食フコトガ出来ナカツタ故グ

ライテ少シノ心記モナイノテ御安心被下度願ます。では又其中ニ御意得ましよ、 東京日暮里村千百十八 満谷国四郎

【解説】明治三十五年九月十日発行の「小天地」第二巻十二号に付随する絵ハガキ二葉を、国四郎が担当している。そのため泣蓮は、国四郎に「小天地」を送ったのであろう。「表紙ノ面白ノニ驚イテ実ハ某西伯ノ手ニナリシモノカ聞キ度存候」とされる表紙は、沈鐘子（秋の初風）だが、この文面によるとこの沈鐘子は泣蓮ということになる。泣蓮は「茶話」（昭和元年十月 洛陽社）に「ハウプトマンの『沈鐘』を読むと、……と綴り、さらに「忘れぬ人々」（大正十二年四月 金尾文淵堂）の「森林太郎氏」の箇所に、「たしか明治三十九年五月頃だったと思ふ。（中略）岩野氏（岩野泡鳴―稿者注）は、その当時何かの雑誌に出てゐた森氏のハウプトマンの『沈鐘』の一節の翻訳を引合ひに出して、「あの訳はあれでいいのですか」と訊いたものだ」と、ハウプトマン「沈鐘」に注目していたことが窺える記述を残している。「先日ノ大風雨」に關して、たとえば「氣象要覽」（中央氣象台 明治三十五年九月）には、「自二十七日至二十九日暴風雨」とあり、具体的には、「風水害ハ千葉、茨城、群馬、福島、山形ノ諸県ニ甚シク人畜ノ死傷、汽車ノ転覆、煙突ノ破壊、巨樹ノ抜折、家屋ノ潰損等ノ多キヲ以テ知ルヘシ」と説明されている。

⑨明治三十八年五月四日 封書 巻紙 フデ

【発信者欄】東京日暮里千百十八 満谷国四郎 五月四日

【受信者欄】□（岡か？）山県浅口郡運島村 薄田泣蓮殿

【発信局印】（判読不能）

【受信局印】 備中 西ノ浦 廿八年五月六日 八便

拝啓 先日來ハ度々御芳簡を辱せしニもか、わらず一向御不沙汰勝二打過ぎ失礼仕候 御作白玉姫のは先月中旬駄作ヲ金尾子ニ相渡し申置候 端書の方ハ只今熟考中 一般が進歩して居るのでから小天地時代ノ者を只今拝見スルト冷汗が出来ますから可成工夫ヲ重ネ度存居申候、只今も「カタロク」ノコトで金尾子來ラレ此間一寸話アリシ御願ノ一件ニ付最早大兄の元へ御通知ニ成タト聞き驚イテ申訳ラスルのです 実ハ今春の太平洋画会展覧会ノ「カタロク」ハ画報社ニ依頼致居候処 金尾君の話モアリ会ノ為メニモ便利デアリ來春カラモ都合宜しきコトナレバ旁々同君ノ手ヲ借りるコトニ致居候処で 此ノ間小生ノ友人共集會の節「明星」ニ関係して居る者ナド存上候て 序文ヲ一ツ大兄ニ願タラ大ニ光彩ヲ放ツタロヤト云フコトガ一寸出タノで満場大賛成で丁度僕ガ知己ノカラ僕カラ願ヘト言フコトニ相成タノでス 僕も今度ノ會ナンカモホトンド僕ガ世話ヲシテルノで 世ノ中ニモ兄トナラ居ルノでスカラ大兄ニ序文カ願ハル、ナレバ此ノ上ナキ幸福ダト信じて大兄ニ願ふコトヲ引受けタノでス ドライカ何でモヨイノデスカラ

序ナリ詩ナリ一寸一口御願ヒ申シマス、御承諾ヲ乞ふ 展覧会モ見ナイで充分無理ナ事でスカ何トカ御考ヘガアルダロト存じラシテ斯の如ニ候「本ハ普通雑誌ノ大サで序、出品者ノ全カタロク、重ナ画ノ銅板五六十、ト云フ理ナノデス 夫レテ今年ノ展覧会ハ今迄三年ノトハ大ニ整理シテ出品モ骨ガ折レトルノデ好成績です」ジャン・ポー ローランス」先生ノ画ガ出タノデ此上ニモ目ヲ引キマシタガ 大家ノ画ガ出タ為メニ素人ニモ他ノハ見ラレン 見ル者ハナイト云フコトニ成テ骨ヲ折タ我々ノ製作ヲ更ニ光輝ナクツマランコトニ成タノデスガ 然し夫レハ幾数等モ上ノ者ガアル為メテ日本ノ画界全バンカラ言ヘハ勿論整頓シタ会ナノデスカ 今月末迄ニハ小生モ一寸帰国 愚父ヲ見舞ふつムリでスカラ久々振ニ御面会ガ出来ルト楽んで居ルコトデス 何カ御土産ヲ持テ行キマスガ 序ノコトハ其ノ時でハ少し遅レルト金尾君カ申シマスカラ御承知被下候へば今月廿日頃迄ニ願ヒマス、今度ハ油画ノ少サイノヲ持テ行キマスガ松尾君ガ温ルカラ如何ニカセネバナラント考テ居リマス 何レハ御面会ノ役ニ譲リマス

五月四日 満谷梓 薄田大兄 机下

【解説】泣蓮の「白玉姫」は、明治三十八年六月に国四郎の挿画装幀で金尾文淵堂から出版されている。「駄作」とはその原画のことか。国四郎が泣蓮に依頼している「序文」とは、「太平洋画会画集」(明治三十八年四月 金尾文淵堂)のカタログの序文で

ある。実際、それに泣蓮は「序歌」と題する歌を寄せているが、これは後の「芸のゆるされ」(白羊宮)明治三十九年五月 金尾文淵堂)と近似している。「小生ノ友人共集會の節「明星」ニ関係してゐる者」として候補に挙がるのは石川寅治、鹿子木孟郎、石井柏亭であろうか。石川寅治は、明治三十七年三月に(孔雀)、五月に(海原)、八月に(花あやめ)など、頻繁に「明星」へ絵画を載せている。鹿子木孟郎は同年十月、「美術新報」<sup>52</sup>に鹿子木孟郎「偶感(二)」が掲載され、以後翌年にかけて、「美術新報」【明星】誌上で鹿子木对三宅克己・和田英作による、いわゆる「水彩画論争」が展開される(前掲)もうひとつの明治美術「(三九頁)とされるが、「明星」巳年第二号(明治三十八年二月)でも「心明無疑」というそれに関する評論を掲載している。しかし、三人の中で最も多く「明星」の挿画・評論を担当しているのは石井柏亭である。柏亭は「明星」巳年第五号(明治三十八年五月)で「太平洋画会の諸作」という批評も執筆しており、三人の中で「明星」と太平洋画会、双方に最も関係が深い人物だと言える。

「ジャン・ポー ローランス」とは、当時パリの画塾アカデミー・ジュリアンで教鞭を取っていた水彩画家である。明治三十四年「パリに留りアカデミー・ジュリアンに学んだ鹿子木孟郎・河合新蔵を除く四人(吉田博・中河八郎・丸山晚霞・満谷国四郎)一稿者注」は、明治三十四年の夏から秋にかけて帰国して」いる。

太平洋画会展覧会に出品されたローランスの作品は「ルーテル  
彼レノ徒弟」(『近代日本 アート・カタログ・コレクション』太  
平洋画会 第一巻 二〇〇一年五月 ゆまに書房)で、「プロテ  
スタントを主題にしたもの」(前掲『鹿子木孟郎展―師ローラン  
スとの出会い―』一二〇頁)とされている。

⑩明治三十八年五月十五日 ハガキ 表面フデ・裏面ペン

【発信者欄】 浅尾村 満谷 (本文末尾)

【受信者欄】 浅口郡連島村 薄田淳介様

【発信局印】 □□ 総社 廿八年五月一五日

【受信局印】 備中 西の浦 □□年五月一六日 イ便



書簡⑩ 明治三十八年五月十五日

昨日到着しました 両三日の中御面晤ヲ得ルコトハ相成可申樂み  
申居候 早々 浅尾村 満谷

【解説】⑩の手紙から約十日後の書簡となる。泣菫は、明治三十  
七年二月「生活苦により連島に帰リ静養」(前掲『泣菫残照』二  
一二頁)にいた。明治三十八年十月には、結婚相手の市川修と面  
会するため京都に赴いている。明治三十九年一月六日、与謝野寛・  
晶子連名の年賀状が「備中国浅口郡連島村・薄田淳介」宛に届  
ているため(前掲『泣菫小伝』五 五頁参照)、泣菫はこの頃ま  
で連島に居たものと思われる。なお国四郎は書簡⑨で綴っている  
ように「愚父ヲ見舞ふつムリ」で岡山に帰省している。この時の  
父親の様子は、「病床の父 準一郎」(『明治38・5・20 慈父於  
病床 永眠の前の約一ヶ月 国四郎写』の字あり)という水彩画  
に描出されている。

⑪明治三十八年八月四日 ハガキ フデ

【発信者欄】 東京日暮里 千百十八 満谷

【受信者欄】 岡山県浅口郡 連島村 薄田淳介様

【発信局印】 □□ □-8-4 □(前か?) 0-40

【受信局印】 備中 西ノ浦 □八年八月五日 口便

君ノ画端替ノ内ノ一ツ画キノコナイナリ原画ハ此レトハモ少シ  
位置モ違ウシ大ニヨイノダ 画室ノ隅ニ背ルノモヲシク此レヲ 連  
島迄持行き捨テルナリ

〔この書簡に付された国四郎自筆の絵について、書簡本文は掲載  
されていないが「満谷国四郎残照」一〇五頁に、「三日月の下月  
見草にかこまれて、左手を額に当てた薨いをおびた和服の夫人の  
姿を描いた葉書」と紹介されている。〕

【解説】「原画」が何を指すかは分かっていない。ハガキに描か  
れた絵と似た構図を持つ国四郎の作品には、山の陰に半分隠れた  
月を背景に月見草に囲まれた女性を描かれた《かぐや姫》がある  
が、《かぐや姫》の発表年は明治四十二年となっており、若干の  
差がある。なお、不同舎の同門である吉田博も、同時期、月見草  
に囲まれて左手を額に当てた女性の絵《月見草と浴衣の女》（明  
治四十年頃 水彩・紙）（前掲「もうひとつの明治美術」一八七  
頁参照）を描いている。

⑫明治三十八年十二月七日 ハガキ フデ

【発信者欄】 満谷（本文末尾）

【受信者欄】 岡山県浅口郡 連島村 海田泣蓮殿

【発信局印】 満州軍総司令部 凱旋記念 東京 38・12・7



書簡⑫ 明治三十八年十二月七日



書簡⑪ 明治三十八年八月四日

【受信局印】 備中 □〔西〕ノ浦 □□年十二月□日 □便

今日元帥ヲ新橋ニ迎ふ 記念画端書売切レ扱所ナク郵便局ニテ画  
ク唯シ写生ナリ 満谷

様子を写生した旨が記されている。国四郎は日露戦争中、「近事  
【解説】日露戦争から元帥大山巖が凱旋 国四郎は新橋で凱旋の  
画報」「戦時画報」で表紙・挿絵を担当していた。

⑬明治三十九年三月九日 ハガキ フデ

【発信者欄】 日暮里 満谷〔本文末尾〕

【受信者欄】 岡山県備中浅口郡 連島村 藤田淳介様

【発信局印】 下谷（以下判読不能）

【受信局印】 備中 西ノ浦 廿九年三月八日 八便

御手紙ニヨリ一寸直シマシタ 今度ハ君ノ名吟ノ意ハ多少ハ伝ヘ  
タルベシト自信仕候 今日金尾へ申置し故ニ来ルべく申置候  
四月ニハ御上京ノ由 実なりや 実ナレバ画室へ戒厳令ヲシカネ  
バナルマイ 松尾兄も同ジコトヲ申居ラレ候 兎角御宿仕リマシ  
よふ 日暮里 満谷

【解説】「御手紙ニヨリ一寸直シマシタ」とは、明治三十九年五

月に金尾文淵堂から出版された『白羊宮』の挿画のことであろう。  
この年の四月、書簡の「四月ニハ御上京ノ由」の通り、「足かけ  
六年ぶりに上京、島村抱月、坪内逍遙に対面」（前掲『泣菫残照』  
二二三頁）している。

⑭明治三十九年六月二日 ハガキ フデ

【発信者欄】 桂夢〔本文末尾〕



書簡⑭ 明治三十九年六月二日

【受信者欄】 岡山県備中 浅口郡連島村 薄田淳介殿

【発信局印】 下谷 3962 后4・5

【受信局印】 備中 西ノ浦 (以下判読不能)

切角楽みニシタ御上京もさてとナルト御面会ノ機モ少く残念致候  
帰途ノ御荷物定メシ御面倒様 金尾君もモヲ金ヲクレタ 松尾君  
ノ方ニモ一口出来 大ニ安心しました 東京の御ウワサニ日モ只  
ナラズでしよふ 田舎ターチガウよ 呵々 桂夢

【解説】 明治三十九年、泣蓮は時増での名声が高まるにつれて発  
表舞台も広がり、「白百合」「明星」「早稲田文学」などの雑誌に  
作品を発表するなど、旺盛な活躍ぶりをみせた。泣蓮が東京に滞  
在している期間に、出版元を東京に移した金尾文淵堂から「白羊  
宮」が刊行されている。「金尾君もモヲ金ヲクレタ」とは「白羊宮」  
の挿画料か。自筆色彩画の上には「東京話の図」と書かれている。  
桂夢は満谷の号。

⑬ 明治三十九年七月十九日 ハガキ フテ

【発信者欄】 東京日暮里ニテ「表」 (満谷のサイン) (本文末尾)

【受信者欄】 備中浅口郡連島 薄田淳介様

【発信局印】 (局名判読不能) □・7・20 前8・9

【受信局印】 備中 西ノ浦 三十九年七月二十一日 八便

本日画伯を驚かし大ニ獲物あり 戦の話しを持帰る事ニ約束致候  
〔満谷のサイン〕 七月十九日

〔このハガキは「満谷國四郎残照」一〇六頁に「葉書①」とし  
て紹介されている。前頁の説明では、「いわゆる当時のモダンガ  
ールの服装の二人が「BANZAI (バンザイ)」と書いたキスし  
ている人形の大きなポスター風の紙をもち、…」とされる。〕

【解説】 「戦の話し」とは、明治三十九年第五回太平洋画会展覧



書簡⑬ 明治三十九年十二月二十四日

会に出品された国四郎の《戦の話》のことであろう。

⑩明治三十九年十二月二十四日 ハガキ フデ

【発信者欄】表記なし

【受信者欄】京都上京区寺町通 鞍馬口下ル高德寺町東側

薄田淳介様

【発信局印】下谷 391225 前6-7

【受信局印】〔局名判読不能〕 301126 □〔前か〕 11・12

実ニ後レながら 御目出度候由 大慶至極ニ奉存候

弊屋一同 御見参ニ入レ申上候 頓首 十二月廿四日

【解説】明治三十九年十一月、泣菫は「京都に出て寺町通鞍馬口

下ル高德寺町に一戸を借り、十二月二日に結婚」〔前掲「泣菫残照」

二二三頁〕している。相手は市川修。このハガキは、国四郎から

泣菫へのその祝辞であろう。国四郎は明治三十二年鈴木すゑと結

婚、翌年長女三重が誕生している。筆で描かれた絵の男女と女兒

が、その国四郎一家を表していると思われる。みな正装と見える。

⑪明治四十年十二月十二日 ハガキ ベン

【発信者欄】東京〔満谷国四郎のサイン〕〔表〕 桂夢〔本文末尾〕

【受信者欄】京都上京区下長者町 室町通り西入〔北側〕

薄田淳介様

【発信局印】下谷 401212 后3-4

【受信局印】京都荒神口 401213 后0-1

君ノ御喜ノ報ヲ聞テ早速御喜ヲ出スコトニ考ヘ、ドーシタコトカ

モー出シタツムリテ昨夜迄平気で居タ処ガ 愚妻ニ聞カレテナル

程トビックリシ此ニ取不肖御喜ビヲ出スコト斯ノ如シ、モー生此

ノ節ハ男でも女でもアル方が良イト云フ方ナンデ何分ニモ御目出

度イ、イツカハ拝見ニ行キタイ者ダ〔但し画ノ中小児ノ手ノ内ハ

詩句ナリ〕 桂夢

〔描かれている絵は「満谷国四郎残照」一〇六頁に「葉書4-7」

として紹介されている。一〇五頁で「幼児を抱き筆と原稿用紙を

もつ和服着流しの男の姿がベン書きで描かれ」「私の母まゆみが

泣菫の長女として生まれたのが同年十一月二十一日なので、これ

に対するお祝いの葉書でしょう」とされている。〕

【解説】「但し画ノ中小児ノ手ノ内ハ詩句ナリ」と言うように、

抱かれた赤子がこちらに向けた両手の平には詩句らしき波線教行

が描かれている。岡山ならびに当時の郷土史にあたってみた限り

ではこのような風習は確認できない。あるいは、一生お金に不自

由しないよう、生まれた赤子の手をコインをにぎらせる慣行と関

係あるか（それを泣菫が詩人であるため、国四郎が工夫を凝らし

たものか)。もしくは、疍の虫封じか。

〔参考〕薄田鶴二宛書簡

⑩明治四十一年一月十三日 ハガキ フデ

〔発信者欄〕日暮里村 満谷

〔受信者欄〕京橋区西紺屋町 森田方 薄田鶴二様

〔発信局印〕下谷 41.13 頁8-9

〔受信局印〕□□〔京橋か?〕 41.13 頁10-12

拝啓 遅延して失礼仕候 十五日ノ頃迄ニハ必ず出来致置可申候  
間 御承知相成度候 草々 日暮里村 十三日 満谷

〔解説〕これは国四郎が、泣菫の弟薄田鶴二に宛てた書簡である。  
この年の二月、泣菫の文集『落葉』が鶴二経営の獅子吼書房から  
刊行されているが、初版の『落葉』には国四郎の名は記載されて  
いない。一方、獅子吼書房の薄田泣菫・薄田鶴二共著『新書翰』

(明治四十一年七月)の広告に掲載された再版予定の『落葉』の  
欄には、「満谷国四郎口繪及装幀」とある。また同広告欄では、  
泣菫『新詩集』が「満谷国四郎及装幀」で近刊ともされている(『新  
詩集』の刊行は確認できないが)。これらに使用するための絵を  
国四郎が鶴二に送る約束だったのであろうか。なお、このハガキ  
には、持戻再配達票が付されている。このハガキは消印により、

十三日中に下谷から京橋局に届けられていることがわかるが、持  
戻票によれば「戸締応答無之」きたため京橋集配人によって一旦は  
局に「持戻」られた。持戻票には翌日一月十四日「前8-9」付  
の「京橋」局印とともに「再達」印が捺されており、配達は翌日  
であった。

〔付記〕

貴重な書簡の利用を御許可下さいました倉敷市に感謝申し上げます。  
また、本稿の作成においては、薄田泣菫顕彰会、岡山県立  
美術館の御教示を得ました。併せて感謝を申し上げます。

本稿は、西山・山本の関わる大学院演習や研究会の成果に基づ  
くものである。その場に参加していた、宮内和世・植田恵理・庄  
伝佳・古川充・橘川透々・藤原愛美・陳宇星・姜文姬・荒木喜  
子・羽田まどか(敬称略)等の諸氏も、それぞれに調査等で本稿  
の成立に寄与するところがあつたことを、ここに銘記する。

(はばら たくや 岡山大学大学院社会科学文化科学研究科  
(にしやま こういち 岡山大学大学院社会科学文化科学研究科准教授  
(やまもと ひでき 岡山大学大学院社会科学文化科学研究科教授)